慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Rene Grousset : Le reveil de l'Asie. (L'imperialisme britannique et la revolte des peuples)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.4 (1924. 11) ,p.158(628)- 160(630)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19241100-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゐるので、長い休息は却て勞働よりも害になる驟馬のやうに待遇せられてゐた』のであつて、その原因が苛重なる種々の課稅であり、さうして人民が『稅金を堪へ難くしたのは、納稅に堪へ得る最も有力な者が之を回避したため』で、從つて『課稅と特權とは……人民の二大敵であり、之に對し國內到る所に不平が盡きないのである』。かくの如く虐げられた彼等の眼にはあらゆる物象は色眼鏡を通じて映ずるのであつて『僅かの暗示や言葉が中空の樓閣や荒誕な牢獄を造り上げ、その幻想は彼等には全く現實と見えるのであつた』かゝる人民、かゝる社會に自由平等が主張され、空前の革命が惹起されたのは、むしろ當然と言はねばならない。

要するにフランス革命は歷史上最も興味ある最大事變の一であつて、その理解には革命の素因の醸された革命前のフランス社會の研究にまたねばならない。而して本書はその目的に對する最良書であつて、今その邦譯を得たことは無上の欣快とするところであり、譯者に對し敬意を表するとともに一般讀書界に本書を推稱したい。

（松本芳夫）

René Grousset: Le réveil de l'Asie. (L'impérialisme britannique et la révolte des peuples) Paris, Librairie Plon, 1924

世界大戰以來の歐洲人の疲弊並びにその思潮の轉向は種々なる方面に之を窺ふことが出來るがその一つとして東洋の神祕なる文明に對する憧憬を數へることが出來る。ルネ・グルーセが一九二二年に著した「亞細亞史」は、實にエジプト以東アジア全體の歷史を一括したる大著であつて從來のアジア史が單なる西人の侵略征服史に過ぎざるに對して現代アジアの背後に連綿たる五千年の偉大なる文化の傳統を闡明せんとする大規模なる試みであつた。

まづ第一卷第一章「古代東邦」に於てカルデア・エジプト・フェニキア・アッシリア・ペルシヤ・ヘレニズム・パルテア・ササン王朝等の文化を略述し、第二章「イスラム」に於てアラビヤ・ペルシヤ・トルコのイスラム文明の諸相を述べ。第三章「十字軍」に沿てビザンチン・フランス各十字軍、最後にトルコの勝利を說明し、第二卷に於ては筆を東方に轉じて第一章「印度」に於てバラモン敎と佛敎について述べ、アレキサンダーの東征よりギリシヤ、佛敎文明の融合を語り、アーリア人の國家、ドラビダ民族の文化を說き、第二章「支那」に於て古代支那より北魏、唐、宋の文化の變遷を叙述し、第三章「印度支那」に移り、同地に於る印度の勢力、クメル・チヤム兩國家、並びに支那の勢力、安南民族の歷史を叙し、第三卷は筆を蒙古民族の世界征服に起し、支那、中亞、ペルシヤに於るその國家建設を說明し、チムールに及び、此民族の雄飛が東西文化の接觸融合をもたらしたることを說き、第二章に於て蒙古の羈絆を脫つしたる後のペルシヤ史、第三章に於てマホメット敎の印度侵入、モンゴル帝國の建設、印度人の反動を述べ、轉じて第四章に元滅以後の支那史を述べ、滿洲朝

に及び、第五章に於て初めて我日本に移り、その歴史を古代、中世、文藝復興期の三時期にわけて説明し、もつて明治維新に及んでゐる。

その結構の雄大なるその叙述の清新なる、曩日著されしレオン・カユンの「亞細亞史叙編」に優ること數等である。もちろん細末には異論をはさむべき餘地あるも浩瀚なる泰西東洋學の最新業績を抄獵してかくの如き大著をなしとげたる著者の努力は尊敬すべきものであり、吾人はペリカ教授の云へる如く各方面の專門家が相協力して本書の瑕瑾を校訂し一日も早く更に完全なる東洋史の出現せむことを期待するものである。

本書が筆を西力東漸以前にとゞめたるに對しその補遺ともいふべき「アジアの覺醒」が本年出版されたのである。四六版二百五十一頁の小册子であるが從來の東洋史が西人の征服侵略を叙するにとゞまるに全く反し、著者は西力治下のアジア國民がいかにめざめきたりしか、その背叛革命の徑路を叙さんとしたのである。

先づ第一章「トルコの國民主義とイスラムの叛亂」に於て、英國對土政策の失敗を述べ、如何に英國が佛國を除外して近東に於て自由に振舞ひしか、そのトルコを自ら治むることの不可能を知るやギリシヤを傀儡として之にトルコ人の鄕土なるアナトリイ・スンエスを支配せしめんとし、その結果ケマルパシヤを頭とせるトルコ民族主義者の蹶起となり、ギリシヤは大敗して、ロウザン會議は遂に二州をトルコに返還することを許容し、英國艦隊は海峽より驅逐されたる徑路を述べ、第二章「シリヤの解放」に於てはシリヤ・パレスチンが地理的に統一せる地域なるにかゝはらず、英國は佛國の勢力をシリヤの狹少なる海岸地帶に限り、パレスチンを切り離し、之に住民の反對に拘らず、ユダヤ人の國家を置き、ダマスとアレッポにアラビヤ王子フアイサルを擁立し、フランスの勢力の增大をさまたげんとし、フアイサルは英國の暗默の支持の下にシリヤに侵入したるが、佛軍のため擊破されシリヤは佛國の支持により自由聯邦政體を組織し解放への途上にある事情を叙し、第三章「エジプトの獨立」に於て、英國は印度の防備上エジプトを占領し、之を保護國としたるが、國民こぞつて之に反對し、英國は餘議なくスウダンを除いてその獨立を認容したるも、彼等はなほこの名議的獨立に甘んぜずスウダンを包含しての絕對的獨立を得んとする運動は日に强烈となりつゝある過程を説明し、第四章「ペルシヤの國民主義とアフガニスタンの獨立」に於て英露の勢力範圍の下にありしペルシヤが日露戰爭に刺激せられて民族的革命運動を起し、立憲政體をしきたるも黨爭の熾烈のため英露に乘ぜられ、大戰中は英國に占領せられ、戰後、過激派の擡頭に伴ひ、英國はペルシヤを赤露の危險に委して、之を己れの庇護に賴らしめんと計りしと、思ひとまらずペルシヤは自己の武力によつて自らを救ひ得る可能を示し、英露二國はペルシヤより全く徹兵し去りたる經緯を述べ、第五章「印度の獨立」に於ては英國の占領が印度の統一をもたらしたるもその人種的偏見は印度人の民族的自覺を促し、日露戰爭の刺激によつて革命運動となり、世界大戰における印度人の忠誠にも拘らず豫期を裏切つて英

國が印度に自由を與へざりしことが暴動を惹起し、英國は高壓手段によつて之を鎭壓せしもその結果は、同敎徒と印度敎徒の接近となり、革命運動はます〳〵內面的に深刻となりつゝある事情を說いてゐる。第六章「極東の變化」に於て筆を轉じて日本の勃興を說き、封建制度の本に鍛へられたる日本が明治大帝の偉業によつて統一的近世國家を形成し、更に國外に發展せんとして朝鮮半島に於て支那と衝突し、之を粉碎したる事情、並びにその結果として列國爭ふて支那に利權を獲得し、時事を慨したる康有爲一派の革命派が新政をしかんとなせしも西太后を頭とせる守舊派が之を拒んで武力によつて政權をとりかへし、ひいては拳匪の亂を惹起し、亂治められしのちもロシアが滿洲を占領して兵を徹せざりし事情を述べ、第七章「日本の覇權」に於てその結果日本が英國と同盟を結び、三十七八年の戰役に於てロシアの大軍を粉碎して極東の覇權を掌握し、ついで世界大戰に際しドイツの勢力を極東より追ひたること、然も戰後のロシア、ドイツの瓦解によつて最早日本との同盟を必要せざる英國が、ワシントン會議に於て日本を被告の位置にたゝしめ、山東半島を支那に還付せしめ、その海軍を縮少せしめ、英米の聯合に對しては明かに劣力に置かしめたること、しかしてアメリカが眞球灣に築塞せると相まつて英國がシンガポールに要塞を置かんとし、日本を假想敵國となしたる事が漸く日本人の眼をさましめ、彼等は新たにロシア、支那、イスラムに接近せんとし內にも外にも事ある日にそなへはじめたりと述べ、かくアジアのヨーロッパ化は國民的自覺を促し、彼等はこぞつてヨーロッパに背叛せんとしつゝあり、今日アジアの主人なる英國は、ひとりこの重大なる難局に處すべき運命にある、たゞ歐州に於ても近東に於ても英國に裏切られたる佛國は、この責任を幸ひに分擔する必要なしと述べて結論としてゐる。

紛糾せる東洋の政局を深刻なる洞察力によつて批判し、之を極めて簡潔に叙述し去りたる著者の手腕には感嘆の外なく、東洋の最近世史を知らんとするものにとり好適の入門書として吾人はひろくこの良書を日本の讀書界に推薦するものである。

（大正十三年九月十七日　巴里に於て　松本信廣）

有栖川宮と飯田忠彥翁（第三卷第三號）の補訂

（補）二四頁一行『忠彥は天保十四年九月より嘉永元年四月に至る迄で、足掛け六ヶ年は病氣靜養であつたと云ふが、この間に江戸に赴き東叡山學寮に入つて博く書を讀んで居たので……』この時丁度東叡山の輪王門跡には當時韶仁親王の第三王子公紹入道親王が御門主として御出になつて居つた。それで忠彥は東叡山の學寮に入つて其藏書を閱讀して野史の史料を採收する事が出來たのであつた。同親王は弘化二年十月一日に薨去せられたので（弘化三年十月十九日發喪）三年四月廿五日に其兄宮である慈性入道親王が大覺寺門跡より移つて其の跡を承けられ、九月十三日に關東に下向せられた。親王は慶應三年十一月廿四日に薨去せられたが、非常に博學賢明な方で、熾仁親王の御伯父宮に當らせられた。